

な意識を持っているかを中心に、学校でのアルザス語教育について多く質問した。このアンケートの分析結果は、来年度修士論文として本学に提出する予定である。

ストラスブールで学んだ10ヶ月で、留学前に文献資料から得たアルザス語やそれに関する社会や文化などの情報や知識を深め、見識を広めることができた。留学での学びや経験は、今後の研究に役立てる所存である。

最後に、本留学のためにご尽力いただいた指導教員の小松祐子先生、仏文の先生方、国際教育センターや国際課の先生方、また調査に協力してくださったストラスブール大学の先生方と学生に深い感謝の意を表し、留学の報告とする。

2022-2023 年度 フランシュ・コンテ大学留学報告

山 田 美 樹

本報告では、2022年9月から2023年6月までのフランシュ・コンテ大学留学の経緯、留学先大学で履修した授業概要、同大学付属語学学校での研究活動について報告を行った。

私は2001年に欧州言語共通参照枠（CECR）によって提唱された言語教育の理念である「行動中心の考え方」に関する研究を行っている。日本の研究状況とは対照的に、フランスではこの考え方に関する研究や実践が盛んに進められてきた。そのため、本学協定校のフランシュ・コンテ大学の言語教授法専攻の修士課程に留学し、FLE教育で世界的に定評のある同大学付属語学学校の応用言語学センターにおいて調査を行うことを目指した。留学の実現に向け、2021年秋に本学の交換留学の学内選考を受け、2022年6月に留学先大学から正式な受入れ許可を得た。交換留学の準備と並行して、2021年秋に2022-2023年度フランス政府奨学金 Master 課程に応募し、合格することができた。その後、2022年9月から本学交換留学生およびフランス政府給費生として留学を開始した。

留学先大学での授業はフランス語教育に関する基礎的知識の習得のみならず、授業実践をも視野に入れた豊富な内容だった。例えば、「Langues,

Cultures, Interculturalité」という授業では、言語教育における文化や間文化の概念の発達を学ぶとともに、自分自身の異文化体験をもとに異なる文化を持つ人々との共生のために必要な能力について考えた。また、既存の教材を参考に間文化能力を育むための活動を考案し、模擬授業を行った。「Matériel Pédagogique pour le FLE」という授業では、言語教育における教授法の変遷を学ぶとともに、各教授法の代表的な教科書を分析し、これまで FLE 教育で用いられてきた教材に関する知識を得た。さらに、授業で学んだ教授法や教材に関する知識を活用し、将来のフランス語教師として特定の教育環境に合わせた FLE の授業構成を考えた。

大学での学びに加え、大学付属語学学校である応用言語学センター(CLA)において、修士論文執筆に向けた、行動中心の考え方の実践に関する調査を実施した。CLA の 7 名の教師を対象に半構造化法を用いたインタビュー調査を行い、フランスの FLE において行動中心の考え方がいかに受容され実践されているのかを明らかにすることを目指した。現場の教師たちから得られた豊かな語りをもとに、帰国後、行動中心の考え方を実際の観点から考察し、修士論文にまとめて本学に提出した。

本留学では FLE の理論や実践に関する知識を得るとともに、現地調査を通して研究を深めることができ、大変充実した日々を過ごすことができた。本留学のためにご尽力いただいた指導教員の小松祐子先生、いつも熱心にフランス語のご指導をしてくださるクリス・ベルアド先生、仏文の先生方、国際教育センターや国際課の先生方、留学先でお世話になった先生方に深い感謝の意を表し、留学の報告を終えたい。